
シンポジウム報告

台湾における「中国大陸研究」

石之瑜（台湾大學政治学系教授）

包淳亮（中國科技大學通識教育中心助理教授）

邵軒磊（台湾師範大學東亞學系助理教授）

要約：

本稿では「中国研究」という存在が、一人ひとりの学者の、概念上の選択と論述を絶えず行っていくことによって形成される、という前提の下分析を行う。現代の台湾は、植民地の経験や内戦の歴史、あるいは冷戦の遺産などを継承しており、学者たちが関連する知識の生産に従事する際には、まず学者自身が社会に対してどのような立場をとるべきかを考えねばならない。すなわち台湾の学者が中国研究を行う場合、中国の位置づけに向き合うことが要件となっている。本文では台湾の「中国研究者」がこれまで向かい合ってきた中国に対する認識を整理し、異なる時代や場所において個々の学者が行ってきた選択や、あるいはその過程で生じた不確定性、及び中国が世界各地の学者に及ぼした多元的な意義などを考察する。

キーワード：知識史、冷戦、反共、皇民化政策、台湾アイデンティティー

Abstract:

China scholarship in Taiwan is constituted by the choices of scholars over encountered and constantly reinterpreted imaginations of how China's names, identities, and images are incurred. Due to its colonial history, Civil War and Cold War legacies, and internal cleavages, China scholarship in Taiwan consists of strategic shifting among the Japanese, American, and Chinese approaches to China as well as their combination and recombination. The mechanism of choice, including traveling that orients, reorients, and disorients existing views on China, produces conjunctive scholarship. The mechanism of encountering informs the China scholarship in Taiwan and reveals both the uncertain nature of knowledge, in general, and the uncertain meanings associated with China.

Keywords: Intellectual history, Cold War, Anti-Communism, Japanization, Taiwan Identity, mechanism, encountering, choice

一、中国及び大陸研究における遭遇と選択

一般的に「科学」と名の付く研究においては、「客観的なもの」を目指し、可能な限り研究者個人の偏向を避けるべきである、と考えられている。しかしそれが避けられるかどうか、あるいは避けるべきかどうかに関しては、左派（特にネオマルクス主義者）や近代化論者、ポストモダニストの議論に見られるように、多くの議論が展開されている。また、そもそも「避けたい、避けるべき」という考え自体がある種の「意識」であると言える。すなわち、学者の知識が形成・生産される過程においては、意識的にしろ無意識にしろ、必ず「選択」が伴っている。学者は個人を超えた、既存の社会条件によって形成された認識の脈絡の中において、選択的に伝承や再構築、発展や抵抗などを行っている。この考えに基づくと、知識の生成の過程における二つのメカニズムを策定できる。一つは個人の意識を超えたところにある既存の認識の視点であり、もう一つはその中で感知される可能性もしくは不可能性の間で、意識的に選択される認識である。このような「遭遇」は一つの知識メカニズムとして、知識やその範囲がどのように形成されるかに対し制限や啓発をもたらす。(Harding, 1998; Diesing & Hartwig, 2005; Stehr & Meja, 2005) 一方で「遭遇」はその限られた範囲をより強固なものにしたり、逆にそこから離脱させるメカニズムも備えている。(Phye, 1997: 52, 110; Stanley, 2008; Stalnaker, 2010)

それ以上に、そもそも「個人」というものは「社会」の一部であるため、必然的に後者の影響を受けており、たとえ自身が「自由選択」を行ったと認識していても、それは他の人と比べた結果にすぎず、より広範な社会や文化の目線から見た場合、その選択肢が実際には限定されたものの可能性もある。このような文脈に立つと、自身の社会的な役割や経験は偶然に形成されたとも言える。

本稿では台湾の知識人や「中国大陸関連の職務に従事する人々」を研究を素材として、台湾の「中国研究」について分析を行うものである。研究の対象は、論文や雑誌のほか、直接のインタビューや会議の記録なども含まれる¹⁾。このような視点に立った研究は、日本においてもすでに成果が出されている（平野健一郎など, 2011, インタビュー戦後

1) この論文で使用した研究資料であるインタビューの一部は、以下のウェブサイト（『台大政治學系: 中國大陸暨兩岸關係教學研究中心』）で公開している。<<http://politics.ntu.edu.tw/RAEC/act02.php>>

日本の中国研究)。その中で、個人の「中国認識」には「偶然性」が見られて、どういふふうに影響があるかにはそれぞれなことである。これを認めた場合、社会科学の知識の普遍性 (universality) そのものに対して疑問を持たざるを得ない (Diesing, 1992; Latham, 2000)。ここにおいて、研究者たちの「中国認識」と「自身の中国体験」は、相互に影響しつつ形成されていくものであると言える (He, 2011: 257-277; Wu, 2011: 279-297)。

台湾籍の研究者の場合、近代における植民地の経験や国共内戦、冷戦、ポスト冷戦など、様々な出来事が研究者自身の体験とアイデンティティの形成に影響を及ぼしており、研究者達は自分の記憶や体験を基点とし、「中国」に関する膨大な情報を選び出し、恣意的に組み合わせて解釈することが、意識的・無意識的に行われている (Shih, 2011 a)。本稿ではそれを正か誤かという二元対立ではなく、むしろそのような事実を認めた上で個々の研究者の「選択」のメカニズムを解明することが「知識」そのものの研究を可能とし、またその「意義」を見出せると考えている。

二、反日と反共の遺産

国共内戦に敗れた国民党が台湾に拠点を移した後、東アジアは冷戦に巻き込まれ、台湾はアメリカの共産主義囲い込みの前線基地となった。内戦と冷戦は国民党が台湾における統治を、「共産党 (不自由) の中国」に対する「自由な中国」に見せる役割を果たした。当初、国民党は共産主義に対するイデオロギー的な対立を訴えていたが、後に儒教思想の文化復興を強調するようになる。毛沢東が引き起こした文化大革命に対して、自らの中華文化の正統性を強調し、それにより大陸奪回の合法性を強化した。この時期、冷戦よりも内戦が意識の形成に関し重要であった。しかしアメリカが中国との関係を持つようになり、さらにベトナム戦争が終わると、台湾はこの変化に対応するため、徐々に現代化路線をとり始めることとなった。

抗日戦争の前、或いは戦争中に生まれた外省籍の学者は、本人もしくは家族に戦争の記憶が存在しているため、一般的に日本に対する不信感が根強い。彼らの多くが中国の未来のために貢献したい、という意識の下、学問を志している。そのうちの一人の中国研究者である陳力生 (1931-) にとって、中国とは一つの「国家であり家族」であり、それゆえ「厳密に言えば、我々は今日一つの国家に二つの政府が存在しているだけ」(一国兩府) という考えを持つことになる。また彼はインタビューの中で、「抗日戦争のときこそが中国にとって最も苦しい時だった」と述べている (溫洽溢, 2009 a)。中華經濟研究院の前院長于宗先 (1930-) も陳力生と同じように、インタビューの中における

「抗日」の記憶が非常に強い（王綺年，2009）。両者とも日本民族の対する形で「中華民族」の見方を形成しており，中国は「大陸と台湾」が同一のものとしてイメージされている。

しかし，そのようなイメージは必ずしも共産主義と親和性があるわけではない。むしろ「反共」こそが中華民族の使命である，とさえ考える。例えば非常に優れた中国研究者である張煥卿（1935-）は，1979年に米中で国交が樹立される一方，台湾とアメリカの国交が断交された際には，アメリカからの奨学金を放棄し，帰国して反共産党運動に参加した（王綺年，2008）。また戒厳令の解除以降台湾独立の気運が高まる中でもこれらの学者は，これまでの国家アイデンティティーに疑問を抱くものが増えるものの，台湾と中国を違うものとして扱うことは極めて少ない。初めて中国語による経済学の教科書を執筆し，またケインズ学派として有名な施建生（1917-）も外省人であるが，彼は「私は台湾を愛している。なぜなら，私は中国を愛しているので，台湾を愛することは中国を愛することと同義であるからである。台湾を愛するには中国を愛する必要がある，中国が良いときには台湾もまた良くなる……私は台湾のどの統派に属するわけではないが，それでも私は台湾を愛している」という発言をしている（朱元魁，2010）。

一般的に早期の外省籍の中国研究者は，中国は帝国主義の被害者であると考えている。もし中国人民の犠牲がなければ台湾が現在享受しているような自由を獲得することは不可能であり，まずは日本を撃退した国民党が中国を率いることを認める一方，同時に台湾社会にとって中華民国政府がやはり外来政権であり，そのことについても意識的に反省する必要があると指摘する。加えて，中国大陸の社会主義化は彼らの中国に対する認識に大きな困惑をもたらしている。

1980年代以降，確かに研究者達の中における反共産党の意識が徐々に後退したものの，同時に儒教思想が強調され始めた。その文脈においては共産主義を中国の歴史における一つの停滞（災難）としてとらえており，21世紀の中国が儒学的に正しい軌道に戻るべきであると考えられている。そこにおいては台湾の重要性も語られ，例えば東アジア儒教の国際的研究計画において表れている（黃俊傑，2010）。この研究では儒教思想をキリスト教と並ぶ世界の軸とみなしている。また新儒教学者の劉述先（1937-）は，アメリカや香港及び台湾で教鞭をとっていたが，この反共産主義の学者は，儒教と西洋の自由主義思想とは共通する方法論の基礎を備えると考えている。「西洋は圧倒的な勢力を持っているが，それでも我々の間に影響力の及ばない部分がある。我々はまず第一歩として西洋の源流を明らかにし，その後西洋の最新の成果を取り入れ，その上で我々中国の伝統に立ち返ってどのような意義や価値があるかを考える」と述べている。さらに劉述先は政治と文化を明確に分けた上で，「私は中国が国際連合に加盟することに反

対しない。それは現実を反映しているからである。しかし学術、文化、哲学の立場においては、その政治アイデンティティーをもって我が方の文化哲学のアイデンティティーに干渉することはできない」と強調している（朱元魁，2009）。

他方で、意図的に東西の分割を避ける学者もいる。確かに近年西洋の角度から中国を観察する手法は台湾において主流となっているが²⁾、一部の台湾の学者は異なる研究手法をとっており、そこでは自由主義もしくは文化を基点としている。彼らは共に中国に関して、中国共産党の成立以降も伝統的な中国の枠組みを越えていない、と考えている。人権派弁護士の黄黙（1935-）は政治的なアイデンティティーを人権に関する議論から区別し、大陸における人権向上を訴える動きが台湾の独立派と反独立派、あるいは親共産党と反共産党の争いと混在されるべきでないと訴えている。彼は人権を語るときに儒教の思想を考慮すると事態をかえって複雑にしてしまうと考えている（周志杰，張碧君，2010 a）。ニューヨーク大学を退官した熊玠（1935-）教授は、親自由主義者あるいは親西洋理論の学者と称するほどではないものの、中国と国際関係、右と左、中国と台湾などの間でバランスをとるのに大変苦労したと述べている。熊玠は中国研究を行う際に、中国、儒教及び西洋の観点などを実用主義的にとらえ、かつ国際法などを知識の架け橋として利用している。熊玠は可能な限り台北と北京の間で適応しようとし、双方から政治的な諮問も受けている。（白中埤，邵軒磊，2009）

1980年代、多くの台湾の学者が中国を政治的に分析する上で、従来の中国本位の立場から台湾本位の立場に、すなわち中国の外から中国を分析するという傾向が強くなっていった。彼らは中国大陸や海外華人、台湾の人々、そして海外の人々など多様な読者に向けて多くの論点を提供した。これは一つの挑戦とも言える。例えばあるアメリカで教鞭をとっていた学者は、アメリカの学生に中国が直面している問題を理解させるのが非常に難しく、たとえ当人に中国を擁護する意図がなくても、そのように見られてしまうこともあったという。例えば中国文学を研究していた李歐梵（1942-）はこの嫌疑をかけられたことがあった。李は講義において、しばしアメリカの中国に対する主流な見方に挑戦するような主張を行っていた。しかし同時に、その主流の見方そのものが時代と共に変化することもあり、常に臨機応変に対応できるよう準備する必要があったと述べている（單德興，梅家玲，溫治溢，曾柏文，2008）。

2) この種の視点は主に方法論上の個人主義（methodological individualism）を指す。哲学的に言えば、いわゆる自由主義に相当する。

三、冷戦と「社会科学化」

ベトナム戦争自体はアメリカにとって重大な挫折であったが、一方で同時期にフォード財団の強力な支持下においてなされた「環太平洋地域」(Pacific Ring)の研究と教育においては、中国やベトナム共産党など内戦の勝利者をむしろ現代化の失敗者として描き、一方で台湾や韓国などアメリカの支持下で新興資本主義工業化を達成した国々を、資本主義発展の鏡とする流れを作り出すことに成功していた (Cummings, 1997)。国民党の解釈に拠るならば、中国大陆が反攻するべき対象であり、また政治経済的に成功を収めた台湾と比べ劣った地域であるというように考えられ、冷戦の意識が徐々に内戦の意識に取って代わり始めていた。

加えて台湾の戒厳令解除と中国大陆の天安門事件に伴い、民主主義と人権が台湾アイデンティティーを形成する上で重要な要素であるという考えが主流となり、既存の反共産党及び反中の意識に加え、台湾の国際的地位の向上を目指すことが大きなテーマとなっていく。多くの若い学者が科学主義 (Scientism) をその研究方法に採用していることは、国際的な学術の対話を遂行するに当たって非常に有利であり、内戦世代が持っていた中国体験の不足を十分に補っている。特に反中の学者にとっては、科学主義は中国の歴史や哲学から離脱し、知識的な試みにおいて台湾を中国の外に置いており、客観的な事実の観察より、中国とは独立したアイデンティティーを確立することが可能と考えている。科学主義に基づく学術研究においては、内戦の歴史よりも現在の台湾こそが重要となる。ただし科学主義の支持者が必ずしも反中の立場をとるわけではない。香港在住で台湾籍の学者である李南雄 (1940-) は科学主義を支持する一方で、父親である李萬居 (1901-66) のアイデンティティーを受け継いでいる。李南雄はマクロな視点からの比較の手法をとり、大量の研究成果を英語の学術雑誌で発表している。この科学主義により、香港が中国に返還された後も客観的な立場で研究することを可能であると述べている (包淳亮, 2008 a)。科学主義を強調する学者の中にはこれを通じ、两岸関係の発展の可能性を示唆する者もいる。

全体から見ると、台湾の中国研究は内戦、政治的安定、正当性などにその問題意識が集中している。中には理論や方法論から離れることで、市民社会、能動性や政治における効率などを展開しているものもある (Leng & Chu (2010); Chen (2004); Hsu (2009); Tsai (2008))。ここにおいて中国は比較研究の理論における一つのケースに過ぎず、方法論における個体主義 (methodological individualism) が研究方法の道しるべとなっている。

一方で台湾における社会科学的手法を用いた研究の趨勢には問題もある。比較研究の発表の機会が多いものの、台湾人が韓国、インド、シンガポール、東ヨーロッパもしくはロシアなどに留学することは非常に少ない。またオーストラリア及びカナダへの留学も微々たるものである。日本や西ヨーロッパの国々に留学する者はそれなりに多いが、やはりイギリスやアメリカへの留学が突出して多い。結果として、単一の学術的な思考が短期間に蓄積される傾向が顕著で、しかも後戻りをできなくなりつつある。すなわち、他の国における中国研究の趨勢を理解することができないだけでなく、アメリカの流行の研究方法を採用した研究を最も優れたものとみなしてしまう傾向がある。

実践上の関心であれ政治的議題への参与であれ、年配の学者は一般的に欧米舶来の社会科学の理論に躊躇を感じる者もいる。香港で長く教鞭を取った後台湾に戻った謝劍(1934)は自身の民族学の研究に従事するとき、マルクス主義や西洋の人類学及び心理学によって語られる中国に対し、非常に慎重な態度を見せている。謝劍は中国の民衆の中でどのようにして凝縮された普遍的な中華民族アイデンティティーが生み出されるのかについて関心を抱いているが、その人生の多くを香港で過ごした彼は、帝国主義や国民党が共謀して少数民族を抑圧したことと同様に、西洋の学術研究による中国のチベット政策に対する偏見にも大きな不満を抱いている(唐欣偉, 2009)。于宗先も同様に西洋の社会科学に警戒を抱いており、台湾の学者が量的な経済学の研究を行うことを無用の猿真似に過ぎず、また現実を理解していないとの疑問を常に示している。また「台湾で経済学を学ぶものの多くが、経済史や経済に関する事件に興味がなく、またそのような研究が学問として未来を有さないとさえ考えている。これは重大な危機である」と述べている。もちろん、そもそも台湾において経済史などが重視されない理由として、学術的な発表の機会の少なさが挙げられている。なぜなら「台湾の経済そのものは小さく、それに対する研究成果も国際的な学術の場では重視されない」からである。于宗先はそこで、「人文社会科学は多くが国際性よりも地域性に属し、もし台湾と韓国やその他の東南アジアを比較した研究であれば、国際的な学術誌に発表する機会があるだろう」と助言をしている(王綺年, 2009)。

四、研究機構と個人のキャリア形成

年配の外省籍の学者は、多くの親戚が中国大陸におり、彼らが台湾で中国研究に従事する学者となったのは時には偶然とは言い難いことがある。彼らの多くは国民党と共に台湾へ移ってきたが、その国民党が必要とする中国共産党下の中国大陸を研究する人材として、若く優秀な人々が中国研究者としての道を歩むこととなった。彼らは台湾のポ

ストコロニアリズムの文化や社会的な脈絡とは基本的には関係がない。

芮和蒸（1921-）は典型的にその状況に当てはまる人物で、彼の職務は基本的に上からの指示や計らいに従ったものであり、東アジア研究所の所長に就任したこともそれに含まれる。東アジア研究所は台湾で最初の中国大陆研究の学術機構であり、政治大学に所属するものの、設立当初は国民党の情報統制部門のコントロールを受けていた。芮和蒸は東アジア研究所で教鞭をとった後、続いて政治学科の学科長に任命された。その後は訓導長を経て東アジア研究所の所長となった。彼の回顧によると、その職務の変更に對してほとんど心の準備ができていなかったものの、彼自身は政治の世界で名を上げることに興味はなく、ただ調和を重んじ規律を守ってきた結果、上司たちの目に留まり、出世することができたとしている（王信賢，2008）。同様に台湾大学で17年に渡って大陸研究の講座を担当した王章陵（1927-）も、その研究や講座は上からの指示に従ったものである（溫洽溢，2009b）。

もちろん全ての人が彼らと同じというわけではない。例えば年齢的に比較的若い学者である張煥卿は、大学の事務室で出会った中国系の学者のアドバイスに従いアメリカで学問を修め、最終的に政治大学東アジア研究所の所長になった（王綺年，2008）。李國祈に至ってはその台湾に來た経緯が、家業を継ぐのが嫌で中国の沿岸部に渡り、そこで国民党が管理する海運関係の仕事に携わった結果である（周志杰，張碧君，2010b）。

台湾の学術的な環境の変化について言えば、1960年代以降、台湾の多くの研究者がアメリカで高等教育を受けていたが、北京とワシントンが国交を回復した後、双方が文化学術交流に関する協定を結ぶと大きな変化が訪れる。すなわちアメリカの中国研究の大部分の学術資源が中国大陆のものへと傾斜し始め、アメリカに留学した台湾人がそのままアメリカに残る機会が急速に減少し、結果として特に社会科学を研究する大量の博士の学位取得者が台湾へ戻らざるを得なくなったのである（楊開煌，2000：頁81）。同時に、国民党は政治力を動員して、中国に関連する研究所を設置し始め、1973年には手始めに四つの大学に「中国大陆問題研究概論」という講座を設けた。その内容は共産党に関する理論、党史、中国共産党の政治、経済と文化などの四つの分野で構成されており、これが台湾の学術的な「中国大陆研究」と関係を持ち始めた。しかし当然ながらこれらの研究の背後にはそれぞれの情報統制機関の意図があり、ある種の神秘的な色彩を添えることとなったため、その多くが大学おける正当な学術的な地位を得ることができなかった（楊開煌，2000）。

張煥卿によると、これらの研究員の出自は大きく以下の三つに分けられる。軍の中の政治工作員、台湾に逃げてきた学生、そして国内の安全保障の責を負う機関である調査局を中心とした情報部門の職員である（王綺年，2008）。彼らの間で出自別の派閥争い

のようなものはあったが、その他の部分に関しては非常に似通っていた。すなわち彼らは皆、反共産党であり、反日であり、反台湾独立であった。確かに東アジア研究所の中国研究は国共内戦の文脈において推進されたものであるが、陳力生の言うように、実際にはその権力は情報部門にあり、その中でも主に国防部軍事情報局と国民党大陸工作会（陸工会）によってその任務が担われていた。特に後者は莫大な予算をもって中国大陸及び海外での情報工作を行っていた（溫洽溢，2009 a）。比較的後になって当研究所に入所した蕭行易（1939-）によれば、国民党の特殊工作員は文革の時期にも多くの中国大陸の内部文書を入手しており、陸工会が最も優秀で実力のある情報部門であることの証であるとしている。軍の情報局と陸工会以外に、調査局も中国大陸の情報の収集にあたった主要な機関のひとつである（白中瑋，劉明香，2008）。政治イデオロギーの研鑽に力を注いだ姜新立（1941-）は調査局出身であり、調査局第四部門で共産党の研究を13年に渡って行い、その後東アジア研究所の設立に伴い、政治大学で教鞭をとることとなった（唐欣偉，2008）。台湾の戒厳令の解除と民主化が進んだあと、国共内戦のモードは後退し、陸工会の役割も縮小した。それとともに東アジア研究所も国共内戦の文脈から離れ、欧米の研究方法をもって中国を観察するようになる。

戒厳令の解除の後、政府は国家安全保障の予算を新しいシンクタンクの設立に投入し、大学の教員を研究者として招き入れたが、その代表的な人物として陳明（1935-）がいる。陳明は国家安全局の副局長の候補にもあがったことのある人物で、陸工会の副主任を歴任し、1990年代には亞洲與世界社の運営を担当、並びに1997年には海峽兩岸交流遠景基金會の業務の推進にあたった。亞洲與世界社と海峽兩岸交流遠景基金會は共に国家安全部門の外郭シンクタンクである（葉路凡，2008）。彼と同じ世代の張京育（1937-）は行政院大陸委員会の主任と政治大学の校長を務めた人物で、その歩みは陳明と多くの部分で共通している点がある。彼が活躍したのは主にセカンドトラックの政策諮問会議などで、国民党の重要な政策顧問として後に政策決定の中枢に入ることとなった。この二人の学者は若いときから大志を抱いており、将来は政府の内部で活躍することを望んでいた。張京育によると、彼は小さい頃から国に報いたいという志を持っており、ドイツの鉄血宰相ビスマルクを理想の人物としていた（姚源明，2008）。陳明は未だに国家に対して大きな貢献ができていないという遺憾を謙虚に語っているが、彼は公私に渡って中国研究活動を続けており、その時代の境遇が彼の人格に現れていると言えるだろう。

1990年代以降、シンクタンクは徐々に政治人物などが羽を休める場所となっていくが、そこにおいても中国研究は一貫して最も関心を集める研究テーマの一つである。台湾のいくつかのシンクタンクが中国研究において非常に重要な役割を果たしている。シ

シンクタンクにおける学者の役割は、兩岸交流における「セカンドトラック」の任務を担うことである。その身分が専任であれ兼任であれ、著名なシンクタンクに勤めている学者の研究成果は以下の二つの特徴が見られる。一つは政策指向型で時評的な研究が多いことであり、もう一つは政治的なバイアスすなわち特定の政党や政治家を支持する傾向があることである。

五、台湾というコンテキストに基づく研究意識

日本統治時代の51年のうち、最後の約10年はいわゆる「皇民化運動」がなされ、その時期に教育を受けた青年や地主階級および専門家などの多くが日本帝国にそのアイデンティティーを同化することとなった。遠い太平洋の島で日本兵として忠誠を尽くした台湾籍の青年もその一人である。「皇民化」の歴史過程は多くの人々の、自身と「清国の奴隷」という認識を一刀両断にし、自身を奴隷の末裔である中国人より高貴な存在であると感じさせた。日本が台湾を中国に返還した後、このような中国に対する考えは払拭されず、さらに二二八事件がさらに中国に対する新しい意識を作り出した。もちろん、これらの特色は必ずしも全ての本省人に当てはまるわけではなく、台湾の各地方の状況によってその皇民化政策の影響にも差が生じている。

しかし注意すべきなのは、多くの人々が無意識のうちに遭遇と意識の選択を行っている。台湾大学社会科学学院前院長の許介鱗（1935-）は東京大学で政治学博士を取得した者であるが、「私自身の日本に対して批判的な態度は、小さい頃の成長の過程で経験した困難からきたものといえるだろう」と述べている。同じように、香港中文大学で長期に渡って教鞭をとった李南雄は、彼の父親の李萬居が毅然とした態度で中国大陆へ行くことと決断し、また国民革命に参加したのは、雲林県の実家での生活が貧困であったことが関係していると述べている。国民党に所属する台湾籍の歴史学者であり、東京大学で国際関係博士の学位を取得した陳鵬仁（1930-）は、第二次世界大戦が終わった時には、台湾の地方では皇民化政策がそこまで浸透しておらず、中国に対するアイデンティティーもなお維持されていたと指摘している（邵軒磊，王立本，2011）。しかし、皇民化教育を受けた台湾人には、発展した台湾・日本と遅れた中国という観点でその差異を認識する者もまた多い。

台湾本土の知識エリートは、強い伝統的な中国文化意識を持っている学者、あるいは現代アメリカの社会科学の方法論を身につけた学者に比べて、特にその文献読解などの点において、中国に対する日本のアジア的な観点を受け継いでいることが多い。その場合、台湾の現在は、植民地独立後のアジアが経た現代化の文脈から解釈され、中国に向

き合う必要がなくなる。彼らは中国文化を台湾とは共同的な価値や歴史的な文脈を有するものと位置づけている一方、二二八事件が反日と反中という二つの間の矛盾を強くしてしまい、異なる背景を持つ人々の間に争いの種を蒔いた、とも考えている。その後の国民党が行った農地改革は、国民党の中国大陸での失敗の反省から実施されたものであるが、台湾人はこれについて「乞食が地主を追い出した」というイメージを持ち、特にエリート階級にとっては、半世紀後に新たな摩擦を生じさせる際の口実となった。

学生運動世代の代表的人物の一人である呉叡人は後に民族主義の学者の一人となったが、呉は『想像の共同体』を書いたベネディクト・アンダーソンが同情を示した弱小民族の概念に基づき、台湾を植民統治され侮蔑された弱小民族とみなし、並びにこの観念は二二八事件を通して形成されたものであるとしている。自身を進歩主義者としては否定している呉であっても、以下のようなこと率直に述べている。「誠実に申し上げるならば、私は二二八事件の歴史を涙を流して読んだ後に、強い復讐の気持ちが湧き上がってくるのを感じる。私はそのような時代を経験した訳ではないだが、史明の『台湾人四百年史』やその他の歴史の書籍を読みながら、強烈な悲しみを覚えさせられる」（呉叡民、呉叡人、謝昇佑、2011）。

台湾独立を支持する傾向のある本土社会学研究者の葉啓政（1943-）は、台湾の本省人と台湾に新たにやってきた外省人がそれぞれ悲しみを背負っており、また歴史的な発展により両者が異なる関心を抱くようになり、結果として対立しやすく、相手を理解するのが困難であると指摘している。特に問題となったのは、この対立が一般の庶民レベルだけでなく、知識エリートにも及んでいることである。対立をもたらした最大の要因は、本省人と外省人の経験してきた歴史の差異に由来すると主張する（朱元魁、2009b）。

先に述べた陳鵬仁が二二八事件を、国民党の統治ではなく、「台湾人の台湾」を築こうとした試みの失敗であると捉えているのに対して、葉啓政はこれを文化の衝突と考える。史明、廖文奎及びその他の多くの人々は、二二八事件が国民党という外来の植民地政権の本質に繋がると認識している。多くの意見が混在しているが、とにかく二二八事件は間違いなく本省人の中国に対する態度に大きな影響を与えた。しかし一方で、双方を親中・親日という基準で区分するのはあまりにも単純化しすぎている。例えば、陳鵬仁と許介鱗は台湾独立に対してほとんど関心を持っておらず、また中国に対する見方に関しても日本留学の際の指導教官の影響を受けていない。さらに、陳鵬仁はむしろ外省人籍の官僚の考えに基づいた立場を堅持している（邵軒磊、王立本、2011；邱麗珍、2009）。これらの人々は、中国と台湾の関係に対する考えは、政治におけるステレオタイプに影響されていない例であるといえる。

六、ポスト・コロニアリズムにおける中国研究

戒厳令の解除以降、台湾における中国研究は急速に拡大した。現代中国を研究する修士論文及び博士論文は、1970年から2006年の間に3,132本執筆されており、その中でも政治大学、淡江大学、中山大学、台湾大学、政治作戦大学及び東華大学の7つの大学だけで2320本、全体の約74%を占めている。政治大学がこの分野では最も傑出していることは否めないが、全体的な傾向から見ると、中国研究に従事する教育機関や学術機構が増加し、また政治大学以外の大学における中国研究もそれに伴い向上しており、『中國大陸研究』や『Issues and Studies』などの学術雑誌への投稿数が増加し続けている。同時に、中国の党政軍の研究が主流であった冷戦時代には主流な研究とされていた外交や国際関係に関する研究テーマが減る一方、当時は最も関心の薄かった経済問題の重要性が高まり、兩岸関係や大陸で活動する台湾企業に関する研究が大きく躍進している。その中で2003年に成立した、中央研究院と密接な連携を持つ清華大学の中国研究が大きな影響力を持つようになってきている（吳介民，陳志柔，陳明祺，2008：頁18-24）。

兩岸関係の重要性は突出しており、元々は中国研究に比重を置いていなかった学者、特に経済や法律の学者が政治的な必要性の下で中国研究に従事する新たな勢力となった。中には馬英九のように、後々直接政治の世界に入った最も有名な法律学者もいる。大陸委員会と海峽交流基金会で重要な職務を経験した中にも、蕭萬長、陳長文、高孔廉そして蔡英文のような、経済や法律をバックグラウンドとする人々が多い。また同じく大陸委員会で主任を務めた陳明通は台湾学派の学者である。政治学の領域では当然多くの学者が大陸委員会や海峽交流基金会で職務に就いた経験を持っている、その中でも特に国際関係を研究する学者が多く、張京育、魏鏞、林中斌、蘇起、吳釗燮、黃介正、張顯耀等があげられる。少数ではあるが、中国政治経済を研究する学者も副主任などの職務についており、吳安家、童振源、趙建民、あるいは国家安全保障會議の諮問委員となった張榮豐、陳德昇などがある。

最高学歴をアメリカにおいて取得していることは、台湾の中國大陸研究の主要な学者における重要な共通点である。例えば宋楚瑜、林中斌、邱坤玄等はアメリカの首都に所在する有名大学で学業を修めた。宋楚瑜はアメリカで修学した際に中國大陸を中心に研究を深めた。無党籍の外省人学者である林中斌はアメリカの著名なシンクタンクである「アメリカン・エンタープライズ研究所」に所属し、そこで豊富な人脈を築き、陳水扁政権が成立したときには蔡英文の後押しもあって、大陸委員の副主任を経て国防部の副部長まで歴任した。長期にわたって政治大学の東アジア研究所所長を務め、後に国家安

全理事会諮問委員になった邱坤玄はジョージ・ワシントン大学で学位を取得しただけでなく、ホワイトハウスでの勤務の経験もある。

他方で、アメリカ留学経験者とは別に、政治大学で学位を取得した趙春山や施哲雄等は、伝統的な中国認識や国民党との関係を引き継ぐ一方、国家安全局や情報機関との長期にわたる協力から生じた兩岸対立の思想の影響も受けている。逆に、中国共産党政権との対立という構図が、例えば中・新世代の研究者である董立文や黄介正のように、民進党に入党して「緑陣営」の中国研究専門家となる選択をする後押しをしたこともある。

社会科学における中・新生代の学者には、外省籍の師に対する尊敬もあり、その考えに寛容な者が多い。確かに政治的な立場や国家観に対する認識も異なるが、批判の際にも留保の余地を残したり、批判を避けることさえある。例えば陳明通は、自身の台湾独立派である政治的立場を包み隠そうともせず、また自身を平埔族であり、標準的な台湾人であると称している。(*《經濟日報》*, 2007) しかし陳明通は師である胡佛が自由主義から国家主義に転向したことを批判する一方、同時に胡佛に対する理解も示している。

戒厳令解除以後の台湾の中国研究は、兩岸関係の「出現」に向き合わねばならず、過去の「中国と西洋」の対立の下に築き上げた「文化としての中国」というアイデンティティーだけでは現実に向き合うには不足していた。「中国」は次第に中国大陸の呼称にすぎなくなり、兩岸関係の下における自己認識を確立することが危急となった。この問題に対する解答の中で最も重要な成果の一つと言えるのが江宜樺の『自由主義、民族主義と國家認同』という本で、もう一つは台湾大学政治学科の研究者が中心となって編集した『争辯中的兩岸關係理論』である。特に後者の本は、統合理論や分裂国家モデル、ゲーム理論、戦略トライアングル理論、国際関係及び心理・認知学などの角度から兩岸関係を再構築している。(包宗和, 吳玉山, 1999) その中でも吳玉山教授の「抗衡或扈從」という論文では、その研究の対象がロシアとその周辺国とはなっているものの、兩岸関係を考察する上で非常に重要な参考とすることができる。呉は「中国大陸はすでに過去の台湾の発展モデルを採用するようになり、かつ驚異的な成功を収めた」と述べ、今後中国大陸が台湾と同じように民主化をたどることへの期待を示している。(包宗和, 吳玉山, 1999, 頁1,10-11; 吳玉山, 1998, 頁443-464。) このようにアイデンティティーに関する苦境を打破しようとする動きが見られる。

また台湾において「民主化」及び「本土化」が社会の大きなうねりとなっているが、社会や学術の世界において等しく、台湾と中国大陸との関係を再構築する動きがある。その過程では過去の台湾における「中国共産党研究」の研究方法だけでなく、研究者の国家アイデンティティーそのものを否定することも生じている。台湾では戒厳令が解除とそれに伴う本土化意識の大幅な上昇により、多くの人々が台湾がいかに中国からの

「移民」に向き合い、抵抗していくかを強調するようになった。このような認識に基づく対立は、研究者の数の増加と、ナショナリズムの再構築と、そして政治的な党派争いの激しさを受けて、中国研究の学術的な世界においても徐々に激しくなっていた。例えば1993年前後、中山大学と東華大学の中国大陸研究所が相次いで設立されたものの、そこで招聘された教授は中国研究とは関係のない分野の者が多かった。さらに二十一世紀に入り、この二つの研究所は他の研究所と合併され、すでに改名している。

1987年の戒厳令が解除された台湾で育った新世代の学者の中には当時の学生運動に参加した者も多く、後に「学運世代」と呼ばれるが、彼らは台湾こそが国家アイデンティティーの前提と捉えており、それらの学者にとって、中国は負の側面を備えた、嫌悪する対象ですらある。またこの考えは西洋の視点とは間逆であり、例えば呉叡人はシカゴで学んでいたときに教官から「台湾人の主張は部落主義、部族主義的なものにすぎない」と言われた。呉叡人は「抵抗の意義においてこそ、私は自身が台湾民族主義者であることを称することができる」としつつも、同時に自信の中に中華アイデンティティーが存在することを否定し、「私は今まで一度も自分が華人であると述べたことはない」とさえ述べている。(呉介民, 呉叡人, 謝昇佑, 2011)

これとは異なり、清華大學人文社会学研究所の呉介民は、この「高度な」西洋社会が台湾を「売る」可能性について言及している。呉の議論のよれば、台湾が独立するためには中国大陸の「進歩派」の知識エリートとの間に一種の「兩岸を跨いだ市民社会」や市民の論壇の成立を前提とするとし、ここから呉が「華人」の概念を受け入れていることがわかる。しかし呉は同時に『華人』の概念をもって『中華民族』の概念に取って代える」としている。(呉介民, 呉叡人, 謝昇佑, 2011)

学術的な研究においても、台湾や台湾企業の中国に対する「模範」や「モデル」の効果を賞賛したり、または台湾人と中国人の差異を強調し、あるいはアイデンティティーは「混ざり」、「影響され」、「動かされる」ことに関心を集めるだけでなく、台湾の安全の視点から中国の政治的な転換を検討する傾向が強くなっている。(呉介民, 陳志柔, 陳明祺, 2008: 頁27)

このような考えは中国の民主化に関する観点でも見られる。1997年前後の台湾では香港やマカオに関する研究がおおいに発展したが、それは香港人やマカオ人の関心だけに及ばず、その多くが香港の議会の選挙制度と選挙結果に関するもので、香港やマカオの発展が、民主化(台湾化)のカテゴリーで分析できるかに関心が集まった。しかし21世紀に入り、香港やマカオに関する研究は台湾の中国研究の分野からほとんど消失した³⁾。

3) 例えば学術雑誌「中国大陸研究」に掲載された研究論文を分類、統計すると、香港・マカオに関する研究は、1994年から2001年の間、毎年文章が掲載されていたが、一方2002年からの六

社会科学の本土化の角度から見ると、「このような方法を用いること自体が、我々がすでに中国人だと認識している人々の考えや行為を強調することにつながり、これは研究者が中国人を作り出すこと」(石之瑜, 1995: 頁7)でもあり、人類学の角度から見た場合とは大きく異なる身分の選択であると言える。しかし台湾独立支持の価値観を備える学者にとっていえば、このような進歩的な意識を持って中国に向き合うという態度が、中国に植民化されるという未来から逃れるためであり、このとき、研究者自身が自覚的に、その研究において単一の民族国家を超えて、「植民」に反発を示していると言える。

七、結論

歴史的に、台湾は日本との関わりあいの歴史においては、「否定」という感情に左右されてきた。すなわち「台湾」に関するアイデンティティーが日本の植民地である時期、「脱亜入欧」での自己の中国アイデンティティー否定、そして大東亜共栄圏による脱亜入欧の否定という、否定の否定という潮流の中で巻き込まれてきた。そして、明治以来の自己否定の否定という行為によって、欧州と中国の歴史的な進展に更なる影響を及ぼした。その後の台湾は中国の内戦と米ソの冷戦に再び巻き込まれ、大陸との間の矛盾を含んだ対立が引き続き存在することとなった。結果として、台湾は「現在」を不断に続く新たな場所となっている。そのため、台湾の思想家が中国／大陸に向かい合う際に、彼らがどのように歴史の手がかりをつかむか、あるいはお互いにどのように向き合っていくかは、台湾近代史の多元性と個別の思想家の中での葛藤を通じた選択となる。すなわち、台湾の学界が直面している、中国にどのように向き合うかという問題は、個人の問題でもあり、そして同時に台湾或いは中国の、そして世界政治における問題であるとも言える。

文明、国家、少数民族と個人との間には無数の組み合わせの可能性があり、世界の現地化は限りなく進展していく。中国／大陸の研究における実証研究の対象となるもの、あるいは研究の主体となる範疇もまた数限りなくある。例をあげるなら満州人／漢民族／中国人、アヘン戦争後の中国人、辛亥革命後の中国人、抗日戦争中の中国人、国共内戦後の中国人、文革時の中国人、改革解放を進めた中国人などである。視点を変えて歴史

年間のうちの三年間で全く関係する論文が載らなかった。Issues and Studies の学術雑誌においても同じ傾向が見られ、1990年から1999年まで毎年論文が掲載されており、1999年には全論文の27.3%に達していた。しかし2000年から5年連続で香港・マカオに関する論文が全く掲載されなかった(吳介民, 陳志柔, 陳明祺, 2008: 頁18, 20)。

を横断的に見ると、集居或いは散居の違い、または宗教や言語、その他の習慣から漢民族との間に異なる関係を築いた少数民族の違いがあり、生産関係においてはもっとも下層に属する労働者や農民や兵士という立場もある。あるいは東南アジアの緊張した民族関係の中で暮らす華人、華族、華僑や中国大陆からの移民、台湾における外省人、新台湾人、台湾人。政治における現実がもたらしたアイデンティティーに関する壁にぶつかり、中国を文化と政治に分けて論じた学者、または自嘲気味に自らを「辺境人」あるいは「地球人」と呼称する者、法律上は香港人でもありアメリカ人でもあり、中には三つ以上の身分を持つ者までいる⁴⁾。このようにその人を定義できる身分の範疇は必ずしも一つとは限らず、さらに近年ではアジア人、南島人、自由人などといった新しい身分の再構築も進行している。

ある特定のアイデンティティーの選択において、分化や統合を含んだ「中国」という身分がひたすらに展開され、既定の事実に対する否定や、その否定の否定などが繰り返される。その他の身分に対しては「和」もしくは「戦」の立場をとり、その相互に選択される複雑な過程が、暫定的で異なる判断と感覚をもたらす。この「和」と「戦」の選択は終わることを知らず、王章陵がかつて望んだ天道と人道の終極的な合流に向かうような兆しはほとんど見えない⁵⁾。反対に、台湾人自身がその身分の選択に対して徐々に活発となっている。台湾人は頻繁に起こる重層的な身分の揺らぎの実践を通して、中国や中国人に関するあらゆるロマンチックな想像に抵抗し、中国や中国人に関する想像は一旦雲散霧消してしまう。しかし同時に、一時的な感情の投射に甘んじる結果、一方で中国的なロマンに対してある種の錯覚を与え、このような錯覚は時に独り善がりに拡散してしまう。

多くの漢学の専門家にとって、当人が台湾で生活しているかを問わず、中国とは知性の源であり、また知識の宝庫であり、古典文学から脈々と受け継がれてきた伝統を彷彿させるものである。多くの台湾の学者が学校において中国の經典に関する教育を受けており、そこから知性と価値を汲み取り、現代中国が保有している世俗と交差させ解釈を行っている。中国大陆は大多数の台湾人学者の祖先が眠る場所であり、彼らが漢族か否かに関わらず、そのことについて向き合わねばならず、その結果として祖先を関係のないものとするか、あるいは文化や経済を理由に血統の源流を新たなものとしてつなぎ合わせるかを決めなくてはならない。

しかし多くの戦後の学者が中国研究を始める際、中国を一つの主権的な境界を備えた

4) 例えば翁松燃、李南雄、廖光生などは台湾からアメリカへ留学し、香港で教鞭をとった学者であるが、往往にして香港とアメリカでの身分を保持し続けている。(包淳亮, 2008 b)

5) 王章陵 (2008 a ; 2008 b) を参照。

土地とみなし、国防力によって守られ、また政治力によってコントロールされたものとしている。台湾の学者は内戦と冷戦についての見識を深め、また人民解放軍の台湾に対する軍事演習に刺激され、台湾が危険な立場に置かれていることを国際的な安全保障の角度から思い起こす。ここにおいて「中国」は一種の地政学的な政治の単位に簡略化されてしまう。

それとは違い、多元的な文化のかけらの中において育まれたポストモダンの作者は、一方で別の中国に関する観念を提唱する。いわゆる中国とは舞台であり、その中で役を演じる人々に対し様々な注釈を加えることが可能であり、結果として異なる、複数の中国が創造される。作者は自身の必要に基づいて台本を作成し、また知識の主体となりうる。台湾の学者はここにおいて、複数の中国を求めるアジア主義の提唱者とも潜在的な盟友ともなる可能性がある⁶⁾。

ポストコロニアリズム社会の作者は精緻な多元文化を敏感的に捉え、さらに自身の中国に対する観念を築き上げる。その中で厳然たる中国とは、断片的に現れる文化的な儒教、民族的な漢族、そしてイデオロギーとしての権威主義や社会主義であるが、これらの各種既定の、しかし同時に無意味な範疇において自身の区別や結びつけを行っている。当代の学者においては、台湾人自身のアイデンティティーとして、現代資本主義と儒教、民族上の先住民本土意識、政治上の自由民主主義などを出発点としており、「中国研究」を多元的な見方としている。

後記：本稿の基礎となる中国語版は「在臺灣研究中國／大陸：知識政治與政治知識」というタイトルで《展望と探索》に寄稿した（10巻10期：2012：34-56）。本文である日本語版稿は上述の論文を基礎に、さらに多くの加筆と修正を行ったものである。研究に関しては宇都宮溪氏（台湾大学政治学科）に助力を仰いだ。

6) この点は多くの分化研究論者が提唱している。（陳光興，2006；黃俊傑，2010）。

參考資料

一、中國語

- 王信賢, 2008, 「對芮和蒸的多次訪談」, <<http://politics.ntu.edu.tw/RAEC/act/tw-15.doc>>, ラストチェック2011年9月9日。
- 王章陵, 2008a, 《聖經思辨神學》(台北: 頂淵文化)。
- 王章陵, 2008b, 《論馬英九路線: 全球化禍福的省思》(新北: 陳麗雲)。
- 王綺年, 2008, 「對張煥卿的訪談」, 10月14日, 10月22日, 11月19日與12月17日, <<http://politics.ntu.edu.tw/RAEC/act/tw-9.doc>>, ラストチェック: 2011年9月9日。
- 王綺年, 2009, 「對於宗先的訪談」, 1月17日, 3月17日, 5月30日 <<http://politics.ntu.edu.tw/RAEC/act/tw-13.doc>>, ラストチェック: 2011年9月9日。
- 包宗和, 吳玉山主編, 1999, 《爭辯中的兩岸關係理論》(台北: 五南圖書公司)。
- 包淳亮, 2008a, 「對李南雄的訪談」, 9月5日 <<http://politics.ntu.edu.tw/RAEC/act/tw-3.doc>>, ラストチェック: 2011年9月9日。
- 包淳亮, 2008b, 「對翁松燃的訪談」, 10月3日と2009年2月23日 <<http://politics.ntu.edu.tw/RAEC/act/tw-8.doc>>, ラストチェック: 2011年9月9日。
- 白中瑋, 邵軒磊, 2009, 「對熊玠的訪談」, 3月16日, <<http://politics.ntu.edu.tw/RAEC/act/interviewU熊玠.doc>>, ラストチェック: 2011年9月9日。
- 白中瑋, 劉明香, 2008, 「對蕭行易的訪談」, 3月29日, 4月5日, 4月12日, 4月19日, <<http://politics.ntu.edu.tw/RAEC/comm2/HsiaoHsinI.doc>>, ラストチェック: 2011年9月9日。
- 石之瑜, 1995, 《中國大陸研究》(台北: 三民書局)。
- 朱元魁, 2009a, 「對劉述先的訪談」, 9月2日 <<http://politics.ntu.edu.tw/RAEC/act/tw-14.doc>>, ラストチェック: 2011年9月9日。
- 朱元魁, 2009b, 「對葉啟政的訪談」, 11月11日, 11月18日, 12月23日及2010年12月30日。整理中, <<http://politics.ntu.edu.tw/RAEC/act02.php>>。
- 朱元魁, 2010, 「對施建生的訪談」, 3月 <<http://politics.ntu.edu.tw/RAEC/act/tw-16.doc>>, ラストチェック: 2011年9月9日。
- 吳介民, 吳叡人, 謝昇佑, 2011, 〈民族主義的永恒魅惑〉, 《慕哲咖啡館 CAFE PHILO 地下沙龍》, 4月11日, <<https://sites.google.com/site/wujiehmin/home/she-hui-zheng-zhi-ping-lun/min-zu-zhu-yi-de-yong-heng-mei-huo>>, ラストチェック: 2012年7月9日。
- 吳介民, 陳志柔, 陳明祺, 2008, 〈跨海峽新社會研究: 台灣之中國研究典範更新與新興領域〉, 《當代中國研究通訊》, 第9期, 頁12-33。
- 吳玉山, 1998, 〈現代化理論 vs. 政權穩定論: 中國大陸民主發展的前景〉, 《政治科學論叢》, 第9期, 頁443-464。
- 周志杰, 張碧君, 2010a, 「對黃默的訪談」, 2月26日與5月7日, 整理中, <<http://politics.ntu.edu.tw/RAEC/act02.php>>。
- 周志杰, 張碧君, 2010b, 「對李國祈的訪談」, 8月26日, <<http://politics.ntu.edu.tw/RAEC/comm2/LiGuoQi.doc>>, ラストチェック: 2011年9月9日。
- 邵軒磊, 王立本, 2011, 「對陳鵬仁的訪談」, 1月21日, 整理中, <<http://politics.ntu.edu.tw/RAEC/act02.php>>。
- 邱麗珍, 2009, 「對許介麟的訪談」, 4月24日, 6月10日, 7月13日 <<http://raec.igd.tw/act/tw-7.doc>>, ラストチェック: 2011年9月9日。

- 姚源明, 2008, 「對張京育的訪談」, 7月, <<http://politics.ntu.edu.tw/RAEC/act/tw-1.doc>>, ラストチェック: 2011年9月9日。
- 唐欣偉, 2008, 「對姜新立的訪談」, 9月16日, 11月18日與12月23日, <<http://politics.ntu.edu.tw/RAEC/act/tw-6.doc>>, ラストチェック: 2011年9月9日。
- 唐欣偉, 2009, 「對謝劍的訪談」, 8月11日, 8月13日, 8月26日與2010年1月6日, <<http://politics.ntu.edu.tw/RAEC/act/tw-121.doc>>, ラストチェック: 2011年9月9日。
- 單德興, 梅家玲, 溫治溢, 曾柏文, 2008, 對李歐梵的訪談, 5月18-19日, <<http://politics.ntu.edu.tw/RAEC/act/interviewU李歐梵.doc>>, ラストチェック: 2011年9月9日。
- 黃俊傑, 2010, 《東亞文化交流中的儒家經典與理念: 互動, 轉化與融合》(臺北: 臺大出版中心, 2010)。
- 楊開煌, 2000, 〈台灣「中國大陸研究」之回顧與前瞻〉, 《東吳政治學報》, 11期, p.71-105。
- 溫治溢, 2009a, 「對陳力生的訪談」, 7月, 整理中, <<http://politics.ntu.edu.tw/RAEC/act02.php>>。
- 溫治溢, 2009b, 「對王章陵的訪談」, 9月, <<http://politics.ntu.edu.tw/RAEC/comm2/InterviewTWang.doc>>, ラストチェック: 2012年7月9日。
- 經濟日報, 2007, 〈魯直陳明通, 坦率不做作〉, 《經濟日報》, 4月10日, <http://mag.udn.com/mag/people/storypage.jsp?f_ART_ID=63420>, ラストチェック: 2012年7月9日。
- 葉路凡, 2008, 「陳明的訪談」10-11月, <<http://politics.ntu.edu.tw/RAEC/comm2/ChenMing.doc>>, ラストチェック: 2011年9月9日。

二、英語

- Chao, Chien-min and Yeau-Tarn Lee. 2006. "Transition in a Party-State System - Taiwan as a Model for China's Future Democratization," in Kjeld Erik Brodsgaard and Zheng Yongnian, eds., *The Chinese Communist Party in Reform* (London: Routledge), pp. 210-230.
- Chen, Chih-Jou Jay. 2004. *Transforming Rural China: How Local Institutions Shape Property Rights in China* (London and New York: Routledge).
- Corcuff, Stephane ed. 2002. *Memories of the Future: National Identity Issues and the Search for a New Taiwan* (Armonk, NY: M. E. Sharpe).
- Cummings, Bruce. 1997. "Boundary Displacement: Area Studies and International Studies during and after the Cold War." *Bulletin of Concerned Asian Scholars*, Vol. 29, No. 1, Jan-Mar, pp. 6-27.
- Diesing, Paul and Richard Hartwig. *Science and Ideology in the Policy Sciences* (Piscataway, N. J.: Aldine Transaction, 2005).
- Diesing, Paul. 1992. *How Does Social Science Work?: Reflections on Practice* (Pittsburgh: University of Pittsburgh Press).
- Harding, Sandra. 1998. *Is Science Multicultural? Postcolonialisms, Feminisms, and Epistemologies* (Bloomington: Indiana University Press).
- He, Baogang. 2011. "The Dilemmas of China's Political Science in the Context of the Rise of China," *Journal of Chinese Political Science*, Vol. 16, No. 2, June, pp. 257-277.
- Hsu, Philip S. C. 2009. "In Search of Public Accountability: The 'Wenling Model' in China," *Australian Journal of Public Administration*, Vol. 68, No. 1, March, pp. 40-50.
- Latham, Michael E. 2000. *Modernization as Ideology: American Social Science and "Nation Building" in the Kennedy Era* (Chapel Hill: University of North Carolina Press).
- Leng, Tse-Kang and Yun-Han Chu eds. 2010. *Dynamics of Local Governance in China During the Reform Era* (Lanham, MD: Lexington Books).

- Phye, Gary D. 1997. *Handbook of Academic Learning: Construction of Knowledge* (Maryland Heights, MO).
- Schubert, Gunter and Jens Damm eds. 2011. *Taiwanese Identity in the 21st Century. Domestic, regional and global perspective* (London and New York: Routledge).
- Shams, Manfusa and Kwang-kuo Hwang. 2005. "Special Issue on Responses to the Epistemological Challenges to Indigenous Psychologies," *Asian Journal of Social Psychology*, Vol. 8, No. 1, April, pp. 3-4.
- Shih, Chih-yu. 2011a. "China Studies That Defend Chineseness: The Im/possibility of China-centrism in the Divided Sino-phone World," in Reena Marwah and Swaran Singh eds., *Emerging China* (New Delhi: Routledge).
- Shih, Chih-yu. 2011b. "Taiwan as East Asia in Formation: Subaltern Appropriation of the Colonial Narratives," in Gunter Schubert and Jens Damm eds., *Taiwanese Identity in the 21st Century*, 237-257.
- Stalnaker, Robert C. 2010. *Our Knowledge of the Internal World* (Oxford: Oxford University Press).
- Stanley, Jason. 2008. *Knowledge and Practical Interests* (Oxford: Oxford University Press).
- Stehr, Nico and Volker Meja eds. 2005. *Society and Knowledge: Contemporary Perspectives in the Sociology of Knowledge and Science* (Piscataway: Transaction Publishers).
- Tsai, Bi-huei. "Rights Issues in China as Evidence for the Existence of Two Types of Agency Problems," *Issues & Studies*, Vol. 44, No. 3, Sep 2008, pp 43-70.
- Wachman, Alan. 1994. *Taiwan: National Identity and Democratization* (Armonk, NY: M. E. Sharpe).
- Wu, Guoguang. 2011. "Politics Against Science: Reflections on the Study of Chinese Politics in Contemporary China," *Journal of Chinese Political Science*, Vol. 16, No. 3, Sep., pp. 279-297.
- Yang, Kuo-shu. 1997. "Indigenising Westernised Chinese Psychology," in M. H. Bond ed., *Working At The Interface of Cultures: Eighteen Lives in Social Science* (London: Routledge), pp. 62-76.

三、日本語

- 平野健一郎, 村田雄一郎, 土田哲夫, 石之瑜など編, 2011, インタビュー戦後日本の中国研究 (東京, 平凡社)